泣いて 笑って ナース人生

潜在看護師が地域医療を変える！（前編）

全国訪問ボランティアナースの会 キャンナス代表　菅原 由美

ナースになるなんて！

私は10歳まで生きられないと言われたほど身体が弱く、小中高と病院通いの日々でした。病院との縁が深かったことで医療に関心を持ち、保健委員をやったり、小学校の卒業アルバムにはお医者さんになりたいと書きました。もちろん中学高校になれば、自分の学力では医者になれないと分かります。典型的なお嬢さん学校に通っていたので、親も学校も、良い会社に勤めて早くお嫁に行くのが普通という考え方を持っていました。

私は理系クラスでしたが、理系を選んだ生徒は120名のうち10名だけ。先生からは薬学部に行くように言われました。それしか選択肢がないのです。でも試験管を振るような理科の実験が好きなわけではないし、部屋に閉じこもってする仕事も好きじゃない。どう考えても薬剤師には向いていない。元々結婚願望が強かった私は、薬剤師よりも看護師のほうが子育てや家庭生活に役立つはずだと思い始めていました。そして高校3年の夏休みに進路変更し、看護の道に進みたいと先生や両親に言ったのです。あの時代、ナースの仕事は低く思われており、また身体も弱かったので、当然のように「ナースになるなんて！」と反対されました。それでも、友達から東海大学医療技術短期大学が新設されたことを聞き、大学でキャンパスライフを味わいたい、青春を謳歌したいと思った私は、推薦試験を受け合格。晴れて憧れの大学生、看護学生となったのです。

看護は技術ではなく考えること

やりたいことができるようになったせいでしょうか、私はすっかり健康になりました。大学というのは単位の取り方は自由にできると思っていたのに、選択科目は土曜日の2限だけ、月曜から金曜までびっしり全部必修科目なのです。「えっ、うそっ、朝から晩まで授業なんて、高校と同じ生活をまた続けるの？」と夢が崩れ去りました。ところが、学則を読むと出席は2/3以上と書いてある。1/3休んでも卒業できるんだと計画的に休み続けました。先生方も教授会で何度も私のことを審議したそうです。でも学則を違反していないから留年させるわけにはいかない。「あなたを担当して教師ってなんて情けない職業だと思い知らされた」と言われました。そんな悪い学生として3年間を過ごしたのです。

新設校で1回生だった私達は、学生会でも何でも最初から立ち上げなくてはなりません。みんなで集って話し合ってもなかなか意見がまとまらない。私はぐだぐだするのは嫌いなので先に帰ってしまいました。そして、いない間に副会長に選出され、3年間みんなをまとめるリーダー役を務めることになったのです。それが図らずも今の仕事を始める土台となっているのかもしれません。私は不真面目な学生でしたが、看護は好きでした。実習時間が終わっても医師や師長のOKをもらってお産の見学をするなど、貴重な体験学習をしました。また、実習で目にするがん末期の患者さんが、苦しんで痛がって、そ

れでも家に帰れない。モルヒネもその当時は1日1本しか使えない。あとは偽薬として生理食塩水を打つだけ。医療としてやるべきことがないのに、なぜこんなところに死ぬまでいなければいけないんだろうと疑問がふつふつとわき上がってきました。

今になって思うと私達の学校はかなり特殊というか、先駆的な看護教育をしていました。技術を教えてくれない。その代わりに徹底的に考えることは要求されました。実習はお昼には終わり、午後はカンファレンスです。実習記録ひとつでも、「清拭をした」「何で清拭をしたの？」「1週間もお風呂に入っていないから」「何でお風呂に入れなかったの？」「術後だから」「誰がお風呂入っちゃいけないって言ったの？」そうやってバンバンと突っ込まれます。学生はみんな泣き出してしまうほどです。1人でも答えられないと、5人ほどの実習グループ全員が帰れません。話し合いは夜中になることもあり、あまりの厳しさに逃亡して実家に帰ってしまう人もいるくらいでした。「洗髪をしたいと思った」「何でしないの？」「いつならいいの？」「誰がダメだと言ったの？」「医師に洗髪していいか聞いたの？」したいと思うだけではダメ、実行するために考え、自分の意見を医師にもきちんと言うことを学びました。

ある時、学生が反旗をひるがえして「技術を教えてくれなければ病院で働けない」と抗議しました。しかし先生方は「学校は技術を教えるところではなく、ナースとしての考え方を構築するところ、技術は病棟に行ってから覚えなさい。技術は採血ひとつにしても、あなた達が行く病院によって違います。場所によって違うものを私達は教えられません。一般論として基礎的なものだけを教えます。あとは現場できちんと学びなさい」と言われました。

10か月の病院勤務を経て

そんな訳で、私はマーゲンチューブのことすら分からずナースになり、ICUに配属されました。分からないことを聞かないでやることは危険だと教わっていたので、師長に「この管、何ですか？」と尋ねたところ、ものすごく怒られました。でも、私のために学校の先生が非難されたり、侮辱されるのは嫌だったので、絶対に馬鹿にされないように一生懸命に勉強しました。ICUなんて訳の分からないところに突然入れられて右も左も分からない。毎日インターンのドクターに聞いて、手術の術式なども必死で覚えました。NICUもERもなかったので、赤ちゃんから老人まで、自殺未遂、交通事故、腎移植の患者まで運ばれてきます。一般病棟に務めたクラスメートからは「この3か月で私達の10倍は学んだんじゃない？」と言われたほどでした。

勤務して10か月後、母が心臓病で入院していたこともあり、また結婚も決まっていたため、病院を退職することを決めました。その頃は、親の死に目にも会えないのが看護師だという考え方だったので、「親の看病のために辞めるなんて」と非難されました。でも私は「親の死に目には会いたいです」とはっきり言いました。やがて結婚して2人で暮らし始めましたが、暇でしかたがない。そこで企業の保健室で働くようになりました。定期健康診断では何百人もの社員を診ます。これらをデータ化したらもっと綿密な健康管理ができるのではと思っていました。しかし、立て続けに3人の子どもが産まれ、看護の仕事はリタイヤ。その後、夫の祖父母と両親を在宅で看護することになるのです。

在宅看護のきっかけは、入院先で吐血した100歳の祖母に、医師が胃カメラを飲ませると言ったことでした。「やめてください」と言うと医師は「帰れ」と怒鳴りました。それで家に連れて帰ったのです。祖母は穏やかに家で過ごし、眠るように亡くなりました。葬儀にみえた方々が「おばあちゃんにあやかりたい。このお花いただいてもいい？　私も畳の上で死にたいから」と祭壇の菊の花を持っていかれるのを見て、そうなんだ。みんな家で最期を迎えたいんだと気づきました。それが、訪問ボランティアナースの会設立に繋がっていくとは、この時はまだ想像もしていませんでした。